

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

巻頭言

『世界におけるリハビリテーションの今、そして国際リハ研究会』

山口 佳小里（国際リハビリテーション研究会理事、
国立保健医療科学院 医療・福祉サービス研究部）

2018年7月、聖心グローバルプラザにて、当時40名に満たない会員の皆様とともに本研究会は発足しました。早4年目、関わってくださる皆様のおかげで、研究会はここまで来ることができました。この場を借りて感謝申し上げます。

私は、研究会発足時からの3年間、事務局長として会の運営に携わりました。ゼロから体制を作るのは初めての経験で苦労もありましたが、周囲の方々にサポートいただき、なんとか次期事務局長へ引き継ぎを行える程度には整備できたと安堵しております。

話は変わりますが、2019年国連のUHCに関する政治宣言においてリハビリテーションがUHCのヘルスサービスとして明言されました。これに伴い、WHOは2030年を目標として各国がリハの推進を行うよう提言しており、ガイドラインも発行されました。Lancetにも関連論文・記事が多く掲載されています。

私は主に、研究活動をはじめとする学術領域において海外での活動に従事してまいりました。今後は本研究会の理事として、国内外の動向を見据えつつ、会での研究関連活動を充実させることができると考えています。今後ともどうぞよろしくようお願い申し上げます。WHO関連ページ：

<https://www.who.int/initiatives/rehabilitation-2030>

国際リハビリテーションセミナー2018
第1回通常総会

国際リハビリテーション学の
黎明に語り合う

7月14日（土）12:30-16:30
聖心女子大学 4号館

国際リハ研究会発足時の広報資料より抜粋

[特集] 「コロナ禍で広がる、医療格差
～フィジー共和国の現場から～」

三田村 徳（東北医科薬科大学病院、
2017年度1次隊フィジー（理学療法士））

本特集ではフィジーのTamavua Twomey Hospitalの理学療法士であるDebbie Willemsさんにメールでインタビューしました。



National
Rehabilitation
Medicine Hospital



Bula (フィジー語：こんにちは) !!皆さんは、現地のの人々にコロナ禍の現状を伺ったことはありますか？全世界では2億3600万人が感染し、累積死者数は480万人を超えています。途上国ではワクチン、医療品不足、貧困、食料などによる健康格差がさらに拡大しています。

フィジーは、南太平洋に位置し、四国ほどの面積に約90万人が住んでいます。医療体制は、公立施設が提供する医療サービスは無料、25軒の公立病院により、二次および三次医療を提供しています。Debbieさんの勤務地はTamavua Twomey Hospitalで、首都近郊に所在し、フィジー全土や大洋州（トンガ、キリバスなど）から長期間入院が必要な患者が転院してきていました。結核、皮膚疾患の専門病院も隣接しており、理学療法を提供しています。また、定期的にフィジー全土を訪問診療しています（写真）。

フィジーの新型コロナ感染状況は、約5万1千人が感染し、死者数が647名となっています。ワクチン接種は計57万人接種しており、比較的接種割合は高く、死者数はやや多い状況です。実際に医療現場や生活、これからの展望はどうか、質問してみました。



1. Fiji's COVID-19 infection status and what's your living change?

Since the breakout of the delta variant in April, I have seen changes in communal gatherings. It's difficult for me because I can't visit families. We have created work bubbles, family bubbles which is something different and new. I've seen changes in the way we approach our health and I have invested in herbal medicines and taking natural remedies to help.

2. Current status and issues in the medical field

I currently work as a physiotherapist. During this pandemic, I have also worked 12 hour shifts in our command centre attending to calls from the public regarding everything

COVID. This is extremely exhausting especially when we work 7 days straight. When the staff starting testing positive, we didn't have enough cleaners to decontaminate our work areas. So I spent a week decontaminating the gym. In the beginning, there was not enough PPE. But now we have enough supplies. We are now at a better position to manage COVID patients, PPEs and Infection prevention control measures.

3. How do you think the COVID-19 future measure?

I think we have learn all during this current breakout. And the hospital has just hired a infection prevention nurse so we are experiencing changes in this area. We should be able to handle it better. I feel we still lack in the number of staff but this is something we can work out later and can manage if the systems and processes improve.



想像以上に大変な状況となっております。感染対策物品、感染予防専門家や医療従事者が不足している状況でした。そして、日々ゆっくりと過ごすフィジー人が仕事として、1日12時間を7日間連続にて働いたことには本当に驚きです。フィジーでは観光業が主産業となっており、経済的貧困も多いとのことでした。こうやって連絡を取っていると、ZoomやGoogleツールも当たり前で使用しており、フィジーにおいてもニューノーマルが当たり前となっていました。しかし、農村部や離島など地方における医療・雇用・デジタルなどの格差がさらに広がっている様子でした。

「東京五輪2020」も終わり、久しぶりにあの人に連絡取ってみよう！と気軽に聞いてみると、国際協力へのヒントとなる情報を得られるかもしれません。※新型コロナ感染状況は2021年10月10日現在を示しています。WHO, Fiji Ministry of health and Medical servicesより引用。 <https://covid19.who.int/> <https://experience.arcgis.com/experience/db0cf0a2827d4c718a5a9ad823482028>



写真提供 (2021.9.28 Republic of Fiji) :
Dr.Shradha Shilta(Tamavua Twomey Hospital, Medical officer)



インタビュアー: 三田村 徳
インタビューイ: Debbie Willems
所属先: Tamavua Twomey Hospital

[連載]

**山口高橋の
研究万華鏡***

「研究に興味があるが、何をすればよいのか分からない…」という声にお応えし、編集担当の山口佳小里と高橋恵里が気まぐれに研究について綴ります。

『受け手に伝えるコトバと表現』

研究を進めていると、研究費の獲得、研究倫理審査、研究協力者(対象者)のリクルート、論文執筆や学会発表などの研究成果の発表、書籍執筆や講演など、数々の「伝える」機会があります。高橋はこの1~2か月、研究費申請書類の作成、倫理審査書類の作成、学会発表準備を進めたことに加えて、通常の大学での講義と幼稚園家庭学級で一般の方々を対象とした講演の機会をいただきました。それぞれに取り組みながら、「このコトバや表現は受け手に伝わるのだろうか…」と想いをめぐらせていました。

例えば、受け手が自分の専門とは異なる人であった場合、研究の社会的意義や研究成果から考えられることなどを的確に伝えることは、重要であると同時にとても難しい作業になります。興味を持って読んでもらえる・聴いてもらえるために、情報をどのように取捨選択して、どんな図で見せたらいいのか…どの言葉(用語)を使ったら一番伝わるのか…どんな口調や表情で伝えたらいいのか…などと考えることは山盛りあります。

こんな想いをめぐらせていると、ふと他国の方々とのやり取りに通じるところがあるなと思いました。使用言語や文化が違うことは、非常に分かりやすい大きな違いですが、研究を進めていくうえでも小さな異文化がたくさんあります。本研究会の会員には、大きく異なる異文化において活動し試行錯誤している方やしてきた方がたくさんおられます。そんな異文化での経験を、研究の場で活かしていきたいですね。

(国際リハビリテーション研究会事務局、東北福祉大学健康科学部リハビリテーション学科、高橋恵里)

[コラム] 大室和世の『世界のめがね』

大室 和也 (国際リハビリテーション研究会理事、認定NPO法人 AAR Japan [難民を助ける会])

大室理事は佐賀を拠点に世界中で活動を展開中です。このコラムではそんな大室理事のメガネを通した世界の姿を毎号お届けします。



東日本大震災の時にアフガニスタンから支援を受けた釜石鶴住居復興スタジアム

今年8月、アフガニスタンで大きな政変がありました。20年前まで政権を握っていた組織が再統治したことになりました。私が勤めるNGO (AAR Japan) は、アフガニスタンで1999年から地雷に関する事業を開始し、現在は障害のある子どもが教育の機会を得られるようインクルーシブ教育の事業を行っています。政変と同時にそれら事業の継続が困難になったため、他のNGOとともに、事業が再開されるよう交渉を続けています▼アフガニスタンにも、障害があるために学校に通えていない子どもが多くいます。そのうちの一人に、爆発物によって耳を負傷しよく聞こえなくなった子がいました。機能障害の原因が爆発物であったということ、決して見過ごすことはできません▼日本にいる私たちができることは何でしょうか。現地の活動を続けられるようにNGOに寄付をすることや、関心を持ち続けることはとても重要です。さらに、東日本大震災からの復興のため、アフガニスタンからも資金支援が行われたことは、今こそ思い出さなければなりません。

[お知らせ]

【国際リハビリテーション研究会 第5回学術大会 開催】

日程 2021年11月13日 (土) 10:00~17:00 オンライン開催
テーマ「変化と深化：拡大する国際リハビリテーションの領域」
参加費 会員 無料、学生 無料、非会員 500円
大会HP <https://jsir2021fukuoka.jimdosite.com>
申込フォーム <https://forms.gle/mwQcPrAsmmp1dAex7> 締切 11月5日 (金)



[大会HP]



[参加申込]

【国際リハビリテーション研究会 第6回学術大会 開催概要】

日程 2022年11月13日 (日) 場所 愛知県
テーマ「国際リハビリテーションの新たな可能性：内なる国際化への貢献を目指して」
詳細については今後広報します。お見逃しなく！

編集後記

本号よりニュースレターの編集は新たなチームで行わせていただくこととなりました！これからも皆さまにご愛読いただける記事を作れましたら嬉しく思います！（古川雅一）
このニュースレターを通して、世界を身近に感じてもらえる機会になれば幸いです。これからも皆さまに「そうなんだ！」をお届けしたいと思います。（大西 海斗）
NL作成は初めての事が多く、不安な気持ちでしたがチームの皆さんのアドバイスや執筆者の方が快く連絡をして頂けて無事に行うことができました。（長田真弥）
はじめての特集記事、編集に携わる機会、誠にありがとうございました。新たな気づきと現地との繋がりの大切さが身にしみました。（三田村徳）

事務局 編集担当

古川雅一 (仙台医健・スポーツ専門学校理学療法科) 大西海斗 (コーエイリサーチ&コンサルティング)
長田真弥 (姉ヶ崎ヶアセンターリハビリテーション科) 三田村徳 (東北医科薬科大学病院)
高橋恵里 (東北福祉大学健康科学部リハビリテーション学科) 山口佳小里 (国立保健医療科学院)

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/>
【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局 jsir_office@gmail.com

